

高知大学 病院ニュース

〔 編集 〕

高知大学病院ニュース

編集委員会

委員長 佐野 栄紀

〔 発行人 〕

高知大学医学部附属病院

病院長 杉浦 哲朗

平成24年度「医療安全・質向上のための相互チェック」

医療安全管理部長 横山 正尚

専任リスクマネジャー 坂本 美和 白石 久



挨拶をする杉浦病院長

国 立大学附属病院では、医療安全・質の向上を図ることを目的として、年1回相互に他大学病院を訪問チェックしています。これによって、自院では気付いていなかった問題点の指摘を受けるだけでなく、チェックに向かった方も自院にはない良い点を他院から吸収できるという側面を持っています。本年度は、11月5日(月)に岐阜大学医学部附属病院のスタッフが来院されチェックが実施されました。

国 立大学附属病院長会議常置委員会から通知のあった本年度の重点チェック項目は「手術の安全を確保するための手順」であることから、WHOが定めたガイドラインを基に作成した本院の手術安全チェックリストに沿って、実際に手術部において麻酔導入前からチェックが実施されました。併せて、院内各部署への立入りチェックも実施されました。



病棟での安全管理チェック

講評時のコメントは次のとおりです。

優れている点

- (1) 各部署が多職種と連携協働して取り組んでおり、風通しがよい
- (2) 手術安全チェックリストが活用されている
- (3) 内服薬の自己管理ができていない患者さんの外泊時の内服薬管理に工夫がある

改善点

- (1) 医師ゼネラルリスクマネジャーを新たに配置すること
- (2) 医師からのインシデントレポートの提出率を上げること(現在、約5%)
- (3) 手術室においてスタッフ全員が術野を確認できるようなフレームモニターを設置すること

11 月19日(月)には本院のスタッフが筑波大学附属病院を訪問してチェックを実施しました。見習うべき点としては「病院の方針として、患者誤認防止に患者が参画している」、「病理検体が個別にバーコードで管理されており、検体間違い防止等の対策が施されている」などがあります。

相 互チェックを一つの契機として改善が必要な点については順次改めるよう努力し、優れた点はさらに伸ばしていく所存です。今後とも皆様のご協力をよろしくお願い致します。

退職にあたって



老年病科・循環器科 老年病科・神経内科

土居 義典

私たちの老年病学教室が1981年(昭和56年)4月に創設されて以来32年が過ぎたことになりました。当時、高知県は全国第二位の高齢県であり、高知県に多い、また我が国の二大死因のひとつである心血管病の管理および診療レベルの向上を図り、地元の老年医療に貢献して県民の期待に応えることは新しく設立された高知医科大学に課せられた使命のひとつでした。新設医科大学としては初めての老年病学講座として開設され、これまでに多くの人材が育ち、本学の附属病院のみならず高知県内の主要な基幹病院で専門領域の責任者として活躍するようになってきました。また、老年病科を積極的に支えてくださった皆様方の御支援に深く感謝するとともに、これからも教室員一同、質の高い診療を目指して努力してくれるものと期待しています。

私は、1981年4月の老年病学教室の創設および10月の附属病院の開院に合わせて、本学に講師として赴任しました。老年病科は、教授以下6名のスタッフという少人数でのスタートでしたが、一つ一つのことをゼロから作り出していく作業は、荒れ野を開墾するような大変な努力を必要とするとともに、一方ではやりがいのある仕事でもありました。当時私は本学の将来の発展のためには、卒業生の人材育成が最も重要と考えて本学での仕事を開始しました。その想いは現在でも変わりませんが、30年経過して多くの卒業生が本学のリーダーとして活躍していることは大変嬉しく思います。

日本の高齢社会を先取りする高知県では循環器という専門領域だけでなく、総合内科医として全人的に高齢者の多臓器疾患も見据えながら高度の循環器医療のできる専門医の育成が重要と思います。老年病科はこれからも人材育成を通して、高知県民の期待に応える高度医療を推進できる診療科として、本院の発展に寄与してほしいと願っています。これからも老年病科に対する皆様の温かい御支援をよろしくお願い致します。



精神科

井上 新平

平成5年に精神科の科長になり、途中理事として4年間の空白がありましたが今日まで勤めてきました。これまで一緒に活動してきた看護師、心理士らの仲間、他診療科の先生方、病院の職員の方々に大変お世話になりました。ここではこの間の思いをいくつか記してみます。

一つは閉鎖病棟を開放化したことです。これには相当の労力をかけました。心配する教室員や看護師を東海大学・群馬大学・信州大学に派遣し、帰校後医局でディベートをしました。ディベートで開放化反対の声が強ければ諦めようと思っていたのですが、幸い何とかやってみようという結論になりほっとしたことをよく覚えています。

次は扱う疾患が大きく変化してきたことです。この10年

間に児童青年期と高齢者の受診が大幅に増えました。幸いそれぞれの領域に関心を持つ教室員が活躍し、子どものこころ診療部や近々始まる認知症疾患医療センター中核型に発展しています。成人の疾患では、気分障害と不安障害が激増しました。社会を揺るがす変化とも言えます。当科では、特に難治性の気分障害の治療で成果をあげ、中核的な役割を担うようになってきました。統合失調症の心理社会的治療とともに高知大学精神科が誇れる分野と思っています。

私自身がリスクマネジメントに関わったことも思い出されます。当時の相良病院長からリスクマネジャーの指名を受け、2年間体制づくりに関わりました。夜中に病院長に報告をしたり他大学の評価に向かいたりで、常にどこか緊張した日々でした。

附属病院の活動は質量ともにますます充実していると感じます。これからも職員の方々のご活躍を切に願っています。



13年間有り難う

脳神経外科

清水 恵司

西暦 2000 年 5 月 16 日、大阪大学医学部助教授から本学に教授として赴任して早 13 年が経ちました。一生懸命努力してきたつもりですが、今振り返って見ると大した成果を挙げられなかった気がします。焦れば焦るほど他との摩擦が増すばかりでした。臨床教室を主宰して思うことは、“継承と変革”という行為をバランス良く舵取りすることの困難さに尽きました。赴任直前の大阪大学では、脳腫瘍の基礎研究の継続性にもがき苦しんでいた頃だったので、本学に赴任した時は“変革”を旗印に医局はもとより 3 つの研究室全て改装し基礎研究の充実に努めました。手術用顕微鏡やニューロナビゲーターなど遅れていた手術設備を拡充するとともに、CT・MR・PET などから得られる画像の 3D 合成画像を作成することで術前手術シミュレーションの実践に奔走しました。今では、本教室は基礎や臨床および手術設備の面において major の大学を凌駕する程になっています。また、PET-CT、3 テスラ-MR および高精度外部放射線治療装置といった大型診断、治療機器を備えた

本学は、超一流の医療を提供できる体制にあります。しかし残念なことには、これらの状況を真に理解し、先見性と協調性をもって猛進する努力が教授はじめスタッフや卒業生に乏しいと思えてなりません。数年前より少し工夫すれば、脳腫瘍はもとより脳卒中やてんかんにおいても先陣争いが出来る体制にありました。また、フローサイトメーターなどの大型研究設備によっては、研究遂行のためには、研究者が同時に平等に使用できないものもあります。それ故、もっと真摯に現場の声を聞く努力が上層部に必要な気がします。地域の大学として県下の病院と協調するのは当然ですが、大学の基準はあくまで東京を範とする全国レベルであるべきだと思います。その意味では、脳卒中やてんかん診療などもっと病院レベルで真剣に、早急に取り組むべき課題のように思います。そのためには、教授はじめスタッフは、少なくとも 2 部門で専門領域を極めてほしいと願っています。昨年、脳腫瘍手術が 50 症例を超え、やっとこの面で一流大学の仲間入りが出来たような気がします。しかし、数年前に学内の学長裁量経費に応募した時、遺伝子治療の基礎研究を捕まえて“そんな研究を高知大学で遂行してどうするのだ”と言う評価者が居たのにはびっくりしました。私はこの 3 月高知を去りますが、是非とも皆様、“世界に冠たる地方大学”を目指して日夜努力して下さい。

治験貢献賞表彰

総務企画課

附属病院では、治験に貢献した医師に病院長より表彰状の贈呈をしています。承認前の医薬品の安全性、有効性を確認する治験に貢献した医師を表彰することで、治験に対する理解とモチベーションを高めることを目的としています。

本年度は、平成 24 年 11 月 27 日に治験貢献賞授与式を開催し、昨年度に本院で行われた治験においてご活躍された先生方を表彰いたしました。



授与式後集合写真

◆ 治験貢献賞 ◆

1 位 (同率)	血液・呼吸器内科 教授 横山 彰仁 泌尿器科 准教授 井上 啓史
3 位 (同率)	麻酔科 准教授 山下 幸一 産科婦人科 講師 泉谷 知明

◆ 治験実施優秀チーム賞 ◆

代表者	皮膚科 教授 佐野 栄紀
-----	--------------

平成24年度 医学教育等関係業務功労者表彰受賞



杉浦病院長とともに協口学長に受賞の報告をする両氏

文部科学大臣は毎年、医学又は歯学に関する教育・研究もしくは患者診療等の補助的業務に関し、顕著な功労のあった方を表彰しています。

平成24年度も、この表彰式が11月22日に東京で行われ、本院の受賞者である中澤 正調理師と山本 定子副看護師長の兩名に表彰状及び副賞が贈呈されました。

永年勤続表彰

永年勤続の表彰式が11月22日(木)に朝倉キャンパスで行われました。

岡豊キャンパスからは次の16名の方が表彰されました。

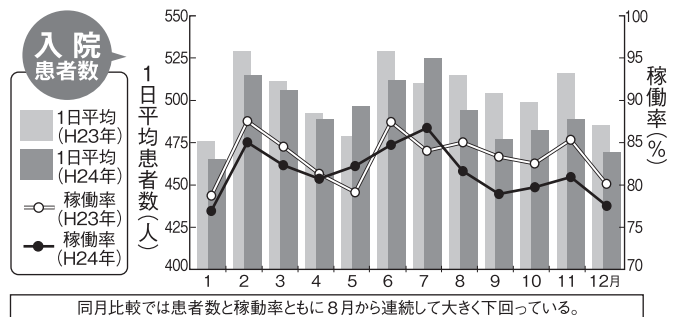
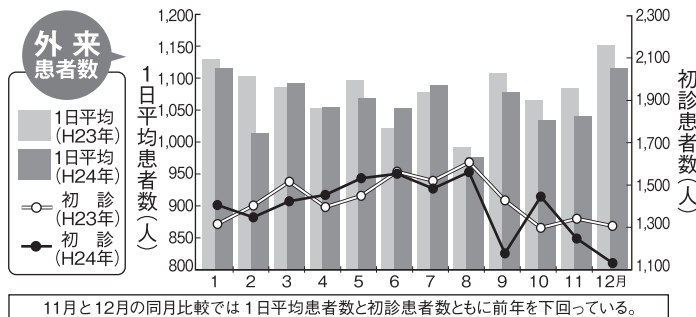
検査部	森本 徳仁	看護部	武田 さとみ
検査部	森本 みゆき	看護部	向田 好美
看護部	公文 典子	看護部	濱口 博英
看護部	小松 誓子	看護部	山崎 佐知
看護部	谷渕 恵美	看護部	小笠原 みわ
看護部	野中 美穂	看護部	小松 和代
看護部	山口 ひろみ	学術情報課	大崎 美紀
看護部	壬生 真貴	会計課	松本 憲一



表彰式に出席された皆さん
[前列中央右：杉浦病院長
前列中央左：楠瀬看護部長]

20年間お疲れさまでした。今後ともよろしくお願ひします。

診療状況



編集後記

紅白歌合戦が終わり、華やかな画面から、ゆく年くる年の静寂な画面に変わる、毎年恒例の時間を過ごし新年を迎えました。今年はこの時間帯から病院システムの更新が行われました。システムの更新時はいつもドキドキします。約30年間病院システムと付き合ってきましたが、同じく大学病院に勤める県外の友人に「開院以来今まで数時間以上システムが動かずに大混乱になったということはない。あったとしても部分的であり、止まったという記

憶はない」と話をすると「それはすごい。奇跡的とも言える。さすが高知だ。」と畏敬の念をこめた言葉がかえって来ました。総合医療情報システムのパイオニアたる所以だと少しうれしい気分でした。今回も細かいつかの不具合はそれぞれあったものの、情報センター及びベンダーの方々また、各部門の担当者の方々に感謝しつつ、新しいPC画面を見ながらいつものように業務を行えるというホッとした気分を感じています。

(文責:市原 和彦)